

苫小牧市総合教育会議議事録

会 議 名	第6回 苫小牧市総合教育会議
日 時	平成29年6月2日 自 10時00分 至 11時00分
場 所	市役所本庁舎9階第2委員会室
出 席 者	市 長 岩 倉 博 文 教 育 長 和 野 幸 夫 教 育 委 員 上 原 毅 教 育 委 員 佐 藤 郁 子 教 育 委 員 佐 藤 守 教 育 委 員 植 木 忠 夫
欠 席 者	
事 務 局	教 育 部 長 瀬 能 仁 教 育 部 次 長 山 口 朋 史 教 育 部 参 事 丹 野 靖 彦 総 務 企 画 課 長 釜 田 直 樹 学 校 教 育 課 長 斎 藤 貴 志 美 術 博 物 館 嘱 託 館 長 荒 川 忠 宏 科 学 セ ン タ ー 副 館 長 松 本 誠 総 務 企 画 課 主 査 下 濱 辰 哉 科 学 セ ン タ ー 主 査 矢 萩 寿 儀 総 務 企 画 課 主 事 前 田 亜 矢 子
協 議 事 項	(1) 科学教育施設の視察報告等について (2) その他
会 議 の 経 過 概 要	別紙のとおり

1 開会の宣言 . . . 10時00分
(岩倉市長) それでは定刻になりましたので、第6回苫小牧市総合教育会議を開催いたします。日頃から本市の教育行政に大変お世話になっておりますことにつきまして、御礼申し上げたいと思います。課題山積のところではありますが、引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。
2 協議事項
(1) 科学教育施設の視察報告等について
(岩倉市長) 早速、式次第に沿って議題に入らせていただきたいと思ひます。「科学教育施設の視察報告等について」というのが、本日の議題でございます。まずは、事務局から説明をお願ひいたします。
(科学センター副館長) 科学センターの今後を検討するにあたり、5月23日及び24日に、旭川市科学館と札幌市青少年科学館を視察いたしました。
お手元にありますのは、2つの科学館について表にまとめたものと、パンフレット及びホームページからプリントアウトした資料となっております。
5月23日に訪問いたしました旭川市科学館サイパルは、昭和38年開館の旭川市青少年科学館の老朽化に伴い、平成17年に駅周辺の再開発地区の北彩都地区に移設、新築されました。沿革ですが、昭和50年代頃と平成4、5年頃に社会教育・生涯学習の中心となるセンター構想があり、老朽化した関連施設の複合化の議論が出ましたが、図書館のみ先行して単体で整備後、他の施設につきましては複合化を断念し、結果として科学館のみ建設に至ったとのことでございます。
現在の施設は、平成8年度に基本構想に着手し、基本計画、基本設計及び実施設計を経て平成17年に開館いたしました。事業費は、用地購入費を除き約50億円で、

<p>そのうち天文教育に有効な施設であるプラネタリウム整備費は約4億5,000万円</p>
<p>です。また、平成26年から平成27年の2か年で約2,500万円以上の費用を掛けてメンテナンスを行っているとのことです。</p>
<p>管理運営形態は直営で、インフォメーションは委託し、来客誘導、実験及び展示説明等にボランティア制度を導入し、維持管理経費としては年間約2億円を要している</p>
<p>とのことです。また、平成27年度の利用者数は約24万8,000人とのことです。</p>
<p>特記事項といたしまして、リニューアルにあたり経費節減と市民協働の理念を踏まえてボランティア制度を導入しましたが、高齢化の進行と新規加入者の減少で運営は</p>
<p>厳しい状況とのことです。将来的にはNPO法人化して指定管理者としたい考えでありましたが、現状では難しく、指定管理の受け皿は市内に他にない状況とのことです。</p>
<p>財政部局から更なる経費節減を求められ、特別展の開催費用や駐車場の管理委託業務を見直ししたということも聞いております。</p>
<p>次に、5月24日に訪問いたしました札幌市青少年科学館は、昭和51年に市の長期総合計画の中で位置づけられ、昭和56年に開館しました。平成7年から平成9年</p>
<p>度にかけて第2期工事が行われ、その後はコーナーごとに複数回リニューアルされ、またプラネタリウムは平成17年度と平成27年度にリニューアルされ現在に至って</p>
<p>おります。特に、平成27年度のプラネタリウムのリニューアル費用は約4億円とのことです。</p>
<p>管理運営形態は、平成11年度に管理委託を受けた札幌市生涯学習振興財団が平成18年度より指定管理者となり、現在に至っております。年間の維持管理費でござい</p>
<p>ますが、約4億5,000万円を要し、平成27年度の利用者数は約33万5,000人とのこととでございます。</p>
<p>特記事項といたしまして、近年は理科教員の新任及び10年目の研修を実施するなど、学校教育との連携を進めているとのことですが、展示物のリニューアル経費が削減されるなど、財政的には厳しい状況にあるとのことです。指定管理者制度導入によ</p>
<p>り、専門的な知識を持つスタッフの活用や自主事業の充実など、きめ細かいサービス</p>

<p>の提供や鮮度の高い情報発信を行っているとのこと。また、平成29年度からは、</p>
<p>今後求められる青少年科学館のコンセプト及び運用整備の方向性を定める基本構想の</p>
<p>策定を予定しているとのこと。</p>
<p>最後に、ホームページをプリントアウトしたのですが、情報提供といたしまして、</p>
<p>昭和38年に道内で最も早く開設された室蘭市青少年科学館に関して、室蘭市が公開</p>
<p>している基本計画を紹介させていただきます。体験型・参加型の環境学習及び科学の</p>
<p>基礎原理・原則を学ぶ施設である仮称・環境科学館と幅広い分野の資料を有する図書</p>
<p>館を複合化し、連携事業や相互利用を促すなど、合築施設の利点を生かした施設の基</p>
<p>本計画の概要版でございます。</p>
<p>以上で、視察報告を終わらせていただきます。</p>
<p>(岩倉市長) それでは、一人一人から感想やお気付きの点等があればお話をいた</p>
<p>きたいと思います。</p>
<p>(上原委員) 都市規模が全然違うので、そのことを念頭に置いて見させていただきました。</p>
<p>やはり、両市とも困っているのは、財政的な面もありますが、施設の入れ替</p>
<p>えやいわゆる展示物のリニューアル、これに苦勞しているのだなというのがとても印</p>
<p>象に残りました。私自身は、以前ファンタジードームというところにいまして、あそ</p>
<p>こもやはり遊具の入れ替えというかリニューアルが一番大きな問題でした。何故かと</p>
<p>いうと、やはり同じものだ飽きてくるのですね。それで、ソフト面も重要なのです</p>
<p>が、ハード面からいくと、展示物のある程度の期間を持ちながら入れ替えていかなけ</p>
<p>ればならない。リニューアルしてリピーターを呼ぶというのが、最大の課題だと思います。</p>
<p>それがやはり、両市とも苦勞しているなと感じました。</p>
<p>それから、運営面に関してなのですが、旭川市は直営で一部民間委託しており、札</p>
<p>幌市は財団だったと思いますが、指定管理者制度を導入して運営しています。確か、</p>
<p>旭川市だったと思いますが、経緯がここに書いてありますが、施設が老朽化したので</p>
<p>複合化するのか単独で建て替えるのかということでスタートしたみたいで、いろいろ</p>
<p>と検討した結果、複合化を断念して科学館のみ建設したということですから、そうい</p>

う面から経緯を踏まえていくと、苫小牧市の科学センターもある程度方向性が示されているのかなという気がいたしました。

もう1つは、では今後どうしていくのかということを考えてみたのですが、少子高齢化ということで、学校もそうですが青少年が非常に少なくなっています。その反面、高齢者の方が増えているということからいけば、青少年限定ということではなく、ある程度青少年に加えて高齢者というか、そういう方々を対象にしたような施設のコンセプトが必要となるのではないかと感じました。

(佐藤郁子委員) 今の上原委員と同じように、展示内容に掛かるランニングコストがばかにならないというお話がありました。今回は旭川でも札幌でもプラネタリウムを見学したのですが、旭川はプラネタリウムがあって天文台があって、その天文台で星を見られることを1つの売りにしているのですが、バリアフリーでリフトを使って車椅子でも上がって見られるようなものをつくっていました。札幌に比べると非常に細やかなところだと思うのですが、お金が掛かるということが1つで、展示としては流行にすぐ飛びつくのではなく、身体を使って皆が参加できるような物の方が故障してもすぐに直すことができるということと、利用する回数が違うということです。例えば、画面でこれは珍しいなと思って見てもすぐに飽きるのですが、身体を使う体力テストのような物は飽きずに何度も来るということで、リピーターのことを考えれば、皆が気軽に参加できて怪我があまり少ないようにできるものが良いのではないかと思います。

プラネタリウムなのですが、1つの科学センターという位置づけであれば、もちろんあった方が良いのかも知れないのですが、それも随分お金が掛かるということで、旭川の機械はドイツ製でマニアの間では非常に人気のあるものなのですが、ではそれが市民に伝わるかというところでもないだろうなということと、星を見て勉強するか、興味のある星というのは、今はアプリでも見られますので、特にプラネタリウムでというようなことがなくても、星座の勉強ができるのではないかなと思います。

旭川と札幌とで比べた時に、体験型で、ここにもあるのですが、木工の工作室とか

そのようなものが人口に比べて旭川の方がかなり充実していたというのが、非常に印象的でした。

それで、苫小牧でプラネタリウムというのは、ミールがあれば外せないというように考えられるのですが、苫小牧の産業を考えた場合に、宇宙ではなく港や港湾の方に考えを移していても良いのではないかなと思いつつ見ていたのですが、複合化まではいかないにしても、科学と産業をタイアップしたような施設で展示も体験もできるのではないかなと思いつつ、今回は視察して参りました。

(佐藤守委員) 皆さん今良いところを言われたのですが、旭川も札幌も、科学館は駅の近くということがありまして、教育施設を中心にするのか、旭川あたりは科学館も観光施設として捉えていましたので、駐車場が大型バスでも駐車できるようなものを完備しているところがありました。教育施設にするのか観光施設にするのかということは、建て替え等を検討する際には、苫小牧でもその辺の考え方を決める必要があるのかなと思いつつ。それと、苫小牧にはミールというものがありますので、プラネタリウムとミールが合体したような他ではできないようなプラネタリウムの番組、例えば「ミールから見た宇宙」とか、プラネタリウムはいろいろな機能を持っているのを見てきましたので、そのような他とはちょっと違ったプラネタリウムの利用法なども面白いのではないかなと思いつつ。

あと、子供たちが体験できるような施設は札幌も旭川も大変面白い施設があったのですが、やはり飽きてしまうということで、10年程度でリニューアルしていくというのが理想らしいです。しかし、コンピューターを使ったそのような見る体験というのは、技術がどんどん進んでいって、いざ更新する時にはそのコンピューターが使えないというような問題もあるということなので、これからそういった施設に導入する場合には、その辺の問題も考えなければならないということをおっしゃっていました。

また、入場するのはやはり低学年の子供たちが多くということで、そのような低学年の子供たちが喜びそうなものを入れた方が良いのではないかなということと、先ほど上原委員も話されておりましたが、年配の方でも楽しめるようなことも考えた、親子

で、あるいは孫と祖父母で遊べるような、そのようなコンセプトで考えた体験型の施設がこれからは必要ではないかと思いました。

(植木委員) 皆さんもお話になっているのですが、2つの館を建てた時の構想、つまり本市は何を狙うのかというコンセプトですね、そういったものをある程度しっかり練らないといけないなと思いました。苫小牧としてはこういうコンセプトでやるというのを、しっかり立てる必要があるなというふうに感じました。たまたま本市には企業がありますので、例えば、紙や自動車や石油精製などに関わる展示を企業と協力してできないものかと思いながら、2つの施設を見て参りました。

プラネタリウムについては、ミールがありますので、その関係で、例えば幾つかの国でやっているように、ミールの軌道をプラネタリウムで描くとか、そういった工夫があれば子供たちが常に興味を持つのではないかと思いました。ですから、プラネタリウムはいらぬという動きもあると思いますが、ある意味目玉の施設でもありますので、その辺を工夫して考えていく必要があると思いました。

それから、2つの科学館もそうなのですが、スタッフの問題です。スタッフをどのように育成していくのか、直営でも指定管理でも、スタッフはやはり優秀な方にやってもらわないことにはどうにもならないなという思いがありましたので、今後の科学センターを考える際には、そういうスタッフづくりということも1つの大きな要素になるのかなと思いました。

また、展示物について、皆さんも先程からおっしゃっていますが、今は最先端のものが5年後や10年後には陳腐なものになるということですので、そういう目玉商品も必要でしょうが、やはり子供たちが実際に触って何か活動できるようなものを多く取り入れる方が有効なのかなと感じました。

(和野教育長) だいたい各委員がおっしゃったとおりなのですが、施設規模が違うのでストレートに比較はできません。苫小牧の人口規模とは違うので、やはり住み分けをする必要があるだろうなと思います。科学センターは室蘭にありますし、それから札幌にもありますので、そういう意味では、その部分は札幌に行ってもいいのでは

ないかという考え方も1つ持った方が良いでしょうと思います。あとは、今お話があったとおり、何をコンセプトにするのかということが大事なのでしょうが、私の考えは、空と海と産業みたいなことで苫小牧には沢山ネタがあるので、そういう活用を少し真剣に考えた施設にしたいのと、それと苫小牧の科学センターで今一番子供たちを集めているのは出前講座ですから、そういうところはきちんと対応して、来てもらって勉強させる施設を充実させる。それと、展示物については、植木委員からお話があったとおり、作ったらすぐに陳腐化するということがあるので、あまり目新しいものではなくて、ベーシックな科学に接するようなものを考えたらどうだろうかというようなことを考えておりました。

(岩倉市長) ご視察をいただいて、一通りご意見をいただきました。

市民ホールのプロセスもそうなのですが、やはりこれからの我々としての公共投資は、しっかりとしたコンセプトワークが大前提になっていくと思います。20年先や30年先の市民にも通じるようなコンセプト、中の展示物は陳腐化しようが何しようが、施設のコンセプトは通用するような考え方をどう組み立てるのかということがポイントかなというふうに考えます。美術館の時もそうでしたが、札幌まで63キロという距離の短さが、苫小牧では非常に難しいですね。従って、どういうコンセプトワークの入口、どうしたらいいのかと私自身もいつも悩んでいるところであります。

徹底的に中途半端な施設を作るべきなのか、徹底的に学芸員もしっかりさせて教育施設としてイメージするのか、徹底的に多くの市民が触れ合うような科学センターが良いのか、考える角度というのも難しいなと思っています。

具体的な話をすると、1つは市民ホールの中に複合化するという考え方が当初からあったのですが、ただ、イニシャルコストを考えるとちょっと難しいかなと。そこは、今後の問題です。もう1つは、駅前のエガオのところが今後どうなるかは別として、ああいうところの雰囲気の中で科学センター機能を持たせる。展示や活動も含めて、ああいう立地で考えていく。これは、どうあるべきなのかなということが1つです。

もう1つは、例えば理数科だと地元では物足りないとのことで室蘭栄高校に行って

いる高校生が非常に多い訳です。何とか科学あるいは理数というものを、子供たちあるいは高校生にもう少し身近に感じさせる、要するにそういう教育観がない、あるいは足りなかった行政が、そういった施設展開の中で、そこをコンセプトにして子供たちに科学あるいは理数というものに触れさせることができるのか。教育的な施設ではなく、その考え方が街の次世代を担う子供たちに科学あるいは理数というものに触れさせる、触れることができる施設みたいなもの、そういう角度が良いのかどうか、非常に悩むところです。高校進学時に、地元で理数科がないので室蘭や札幌の学校に行くというのが昔から非常に目立っているのですが、学校にそこまで頼むというのなかなか難しい話なので、我々の施設展開の中で触れさせるチャンスを沢山持つていくというのも、政策展開としては1つの考え方としてあり得るのではないかと、そのようなことを前提とした場合には、どのような科学センターが良いかということ、結果的には徹底的に中途半端を目指すというのも1つの考え方になるのかなというようなことを思ったりしています。これが、学芸員をしっかり揃えてやるというような方向に行くと、それこそ5年に1度は展示物を替えて、それで市の財政は付いていけるかと考えると、旭川や札幌でも非常に大変で、指定管理の相手もないので、結果的に運営が中途半端になる。運営が中途半端になると施設も中途半端になる。それであれば、最初から中途半端にしても良いのではないかとというようなことも思いながら、先ほどから聞いていました。

(和野教育長) 札幌の青少年科学館を視察した時に、ちょうど登別市の小学生が宿泊研修で来て、プラネタリウムを見ていきました。かなり大きな規模の1億個も星が見える大きなプラネタリウムで、私としてはまるでディズニーランドの施設のように感じました。苫小牧としては、そこまでは不要だと思います。もし、それを見なければ、学校の研修でバスに乗って札幌まで見に行けばいいことですから、そういう意味での住み分けを考えています。市長の言う「中途半端」というのが、そのような意味なのかどうかわかりませんが、そういうこともあって良いのだろうと思います。

それから、ずっと心に残っていたのが、「本物は良いですよ」という札幌の学芸員

さんの言葉です。ミールのことなのですが、「苫小牧には本物があるではないですか」とおっしゃっていました。ですから、本物という意識を持った中で活用するべきだなと感じました。

(上原委員) 確かに、札幌という大都市はいろいろなものを備えていて、非常に魅力的な都市です。そうすると、市長が言われたように1時間足らずで行けるということで、苫小牧だけではなく胆振・日高ですとか、その近辺が全部札幌まで行ける訳です。そういう中で、例えば学校単位で行く場合には交通機関を手配して行けますが、青少年やお年寄りを対象とする場合には、その方々が1人で来られる、そういった観点も大事だなという気がしました。

(岩倉市長) プラネタリウムも、だいたい4億円のもので投影できる星の数が1億個ということなので、今の時代はやはり1億個は必要だという考え方と、さっき言ったように、そこまできているのかという、インターネットで宇宙だけでなく世界中どこへでも行ける時代なので、悩ましいところではありますが、科学センターということになると、非常にシンボリックな物の1つはプラネタリウムということになるのかなと思います。苫小牧のプラネタリウムでは、投影できる星の数は2,000個でしたか。

(科学センター副館長) 6,000個です。

(岩倉市長) 一般論として、6,000個でも物足りないのでしょうか。

(科学センター副館長) 最近の傾向はそうかも知れませんが、夜に肉眼で見える星の数が6,500個から7,000個なので、それだけあれば、特に1億個も星を映す必要はないのではないかと思います。

(佐藤郁子委員) 今回も、肉眼では見えない星も見えますということで、本当に見えるのかしらと言いながらプラネタリウムを見て参りました。プラネタリウムに関しては、今は渋谷がヒカリエになって変わっていますが、東急の上はずっとあったんですね。これは、肉眼で見える星というのが1つの当時の売りで、東京でこんなに見えるのかということで、結構いろいろな人が行っていたのですが、今回は肉眼で見えない星も見えて、あと素晴らしい展望台も天気良ければ木星が見えますよということ

ろで、体の不自由な方やお年寄りも上げられるようにというのもあったのですが、そこまで用意をして、苫小牧でそこまでして見たい人がどのくらいいるのかなというの、1つ単純な疑問でした。それで、中途半端な物をモザイクとして合わせれば完璧な形にもなっていくということなので、科学に特化しないで他と合わせたりして、上原委員がおっしゃったように、産業があるのであれば、見て覚える、体験して覚えるというのは科学でなくてもできる場所もあるのではないかとということ、工作に関しては、旭川の方が非常に設備が整っていきまして、例えば科学的な知識が必要なのであれば、苫小牧は高専がありますので、高専の出前授業ですとか学校祭なんかでも実際にやっていますので、教育施設として小さい頃から科学に馴染ませるのであれば、科学の日でもいいし、その工作のところを実際に体験させるということでも、科学館としての働きができるのではないかなと思います。また新たに、では苫小牧はどのような街なのだろうかということで、中途半端というのをモザイクとして考えるのであれば、産業に目を向けるとか、そのような場所を貼り合わせて作っていくと、苫小牧の人口規模に合ったような物ができるのではないかなと思いました。旭川と札幌とでは施設の大きさが違うのですが、旭川の方が充実しているように感じながら視察して参りました。

(佐藤守委員) ミールに関してなのですが、インターネット等で見ると、苫小牧の科学センターは無料ですよね。札幌や旭川は有料で入館料を取っているのですが、苫小牧の科学センターは無料なので、ちょっと来たついでに寄ってみようか、そうしたら素晴らしいミールがあって、無料なのにこんなものを見られるのかというような感想がインターネットに載っていました。その中でその方が言っていたのが、1回来て見てしまったらもういいということではなくて、また来た時に、ミールが違った形で見せ方を変えていると、また行きたくなるのではないかとというのがありました。ある施設について角度を変えて展示等することによってリピーターが来るような、お金の掛からない範囲で定期的に変えるということも、お金を掛けない科学館の方法としてあるのではないかと思いました。

<p>(上原委員) 旭川の説明員の方が言っていたことで非常に印象に残ったのですが、</p>
<p>一般的に動物園や水族館や科学センターはあってもなくてもいい、必要とされるのは</p>
<p>図書館や美術館や公民館で、そのような施設は絶対必要だと思うと言われていて、非</p>
<p>常に印象に残りました。そういう面からの発想というものも、必要なのかなという気</p>
<p>がいたしました。それは、市長が言われるように、徹底的にどちらかに分けてしまう</p>
<p>というような考え方に通じるような気がいたします。</p>
<p>(岩倉市長) 徹底的に中途半端な中にも、今やっている活動の部分はしっかりと取</p>
<p>り組み、多くの市民にアクセスしてもらえる。そして、来た時には「ああ、なるほど。</p>
<p>ああ、そうか」等と子供たちに刺激を与える装置としての科学館というイメージなの</p>
<p>かなというような議論を、これからも積み重ねていく必要があると思います。担当の</p>
<p>方には、もう我々のようなおじさんに聞いても仕方がないので、若い人でやってみて</p>
<p>欲しいと以前から言っています。</p>
<p>市民の方から見ると、既に市民ホールがリニューアルのプロセスに入っていますか</p>
<p>ら、あとは科学センターはどうなるのだろうかという関心が市議会を含めて出てくる</p>
<p>ので、基本的な作業あるいは考え方みたいなものは、少しずつ出していく必要がある</p>
<p>のではないかと思います。ところで、現状の科学センターでやっている活動について、</p>
<p>コンパクトに整理した資料はありますか。</p>
<p>(科学センター副館長) 事業年報や事業計画書という、10ページ程度の資料はご</p>
<p>ざいます。</p>
<p>(岩倉市長) もう少し簡単に、今何をやっているのか、あるいは今の科学センター</p>
<p>はどのような方向を目指そうとしているのか、A4で1枚程度にまとめた資料が欲し</p>
<p>いです。</p>
<p>(上原委員) 市の総合計画とか、そのような中での位置づけについてはどうなので</p>
<p>しょうか。私は見ていないのですが、何か書かれているのでしょうか。</p>
<p>(和野教育長) 科学センターは入っていません。</p>
<p>(上原委員) そうですか、わかりました。</p>

<p>(佐藤郁子委員) あと、1つ気が付いたのは、展示の中で人気があるのは昔からある体力測定だとか、こんなものに人気があるのかというようなものにすごく集まるのですが、見守るといふか、ボランティアの方なのですが、事故のないようにというの随分多いなと思いました。それで、若い方ではなくリタイアされた方ですとか、そういう方が何かの声をかけて、一緒にやりながら自分の思い出話をしているという、何だか良い触れ合いの場になっているので、さっき話していたように、三世代で行ったらあの方がボランティアでやっているよとか、そういった場になるような施設の方が、身の丈にあった科学センターになるのではないかと思います。</p>
<p>(岩倉市長) そういうコーナーがあるのですか。</p>
<p>(佐藤郁子委員) いろいろな展示があって、体力測定のように、どのくらい早く走れるかとか、自分の力はどのくらいあるのかとか、ぐるぐる回って遠心力を感じてみようとか、コンピューターに全く関係ないような展示の方がすごく人気があって、壊れてもすぐに直す。事故があつたら困るので、周りに誰かが必ず付いているということがあるので、札幌よりも旭川の方が随分手厚いなということを感じました。</p>
<p>今思い出したのですが、グルグル回るような展示は苫小牧の科学センターにもあつたような気がしますが、体力測定のようなものはあまりなかったような気がしました。体力測定は、大人もやりそうで良いかなと思います。</p>
<p>(岩倉市長) 行政的に考えると健康こども部との兼ね合いがありますが、体力測定のような展示については、健康増進機能というところまでは行っていないのですか。</p>
<p>(佐藤郁子委員) そうです。自分の力はどのくらいかという程度です。あれを更に精巧にすると、けっこう人を呼べるかなという気がします。血圧等を測りながらやるとか、それだったら三世代が十分興味を示すのではないのでしょうか。</p>
<p>(上原委員) もちろん、専門の施設についてはそれでいいのですが、外構といいますか、環境といいますか、施設を取り巻くところですね。両施設ともベンチみたいなものがあって公園化しているのですが、そこで市民が休んでいたり休憩していたり、札幌も駅の近くで外構がけっこう整備されているのですが、そういう面ではそういっ</p>

た周辺の整備といいますか、外構といいますか、それも大事だという気がしました。
(岩倉市長) 今の科学センターは築何年ですか。
(科学センター副館長) 47年です。
(佐藤守委員) 建物が古いので地震が来たら心配ということと、どこにあるのかわからないという人が多いですね。
(岩倉市長) それはありますね。なかなか難しい問題ですが。
(佐藤郁子委員) 先ほどお話されていた、理系にといいところにつながるとすれば、どうしたらミールに乗れるのかとか、その辺りで理系の教育と無理やりつなげるとすれば、ミールも生かせるし、それから体験型にもなるのかなというところですが、内容をどこへ持っていくかというところだと思います。
(岩倉市長) 教育という観点からミール宇宙ステーションを考える方法と、ライトアップしたところにミールが宇宙の中である星に寄って次の出発を待っているようなイメージの中で、カフェにした方がいいのではないかという案も以前は持っていたのですが、当時は最初から教育施設として位置づけられていました。
北九州に貸し出した時に、北九州では「宇宙での住まい」ということをコンセプトにイベントをやりました。その時に、当時はまだバブルの時代だったのでお金を掛けていて、ミール宇宙ステーションが星に不時着しているような展示になっていました。それを修理するというコンセプトで、全部宇宙空間があって、ミールを修理しているという説明を聞きながら見ていくのですが、私の目にはもっともらしく映りました。
今でもそうですが、いわゆるイベントをやると、目玉になる展示物は宇宙か恐竜で、これは、世界のスタンダードです。目玉の展示物は、宇宙か恐竜です。
(佐藤郁子委員) 恐竜がありましたね。旭川でしたか、展示スペースは天井が高くなければ使い物になりませんということで、恐竜の展示もそうなのですが、背の高いものは入らなくて、これは中途半端なんですとおっしゃっていました。
(岩倉市長) むかわ町長にも言っているのですが、ハドロザウルス科の恐竜の全身骨格は本当に珍しいんです。ですから、この管内には宇宙と恐竜がありますよと。

